

日本在宅 医学 会誌

Vol.8 No.1

The Japanese Academy of Home Care Physicians

●巻頭言

在宅医療の基本に立つ発展をめざして—「在宅医療研究所」発足の“きざし”—

佐藤 智

●第8回日本在宅医学会

- 特別講演 子どもの権利—いのちのところから在宅医療を考える
- 基調講演 ナラティブ・ベイスト・メディスン
- シンポジウムⅠ (シンポジスト：五島朋幸・古谷 聡・原 龍馬・吉田万三・牛山京子・福田徳治)
- シンポジウムⅡ (シンポジスト：川越正平、他・石垣泰則)
- シンポジウムⅢ (シンポジスト：前田浩利・石垣泰則・島崎謙治・谷水正人 他・蘆野吉和)
- ワークショップⅠ (シンポジスト：上野まり・佐野けさ美・大木信子・樋口キエ子・大神ヨシ子)
- ワークショップⅡ (シンポジスト：三浦邦久、他・林 章敏・広沢正孝・森 清)
- ワークショップⅢ (シンポジスト：中濱孝志・田中葉子・末盛賢司・浮谷勝郎・渡邊 裕、他)
- ワークショップⅣ (シンポジスト：内藤万砂文・溝口功一、他)
- ワークショップⅤ (シンポジスト：佐藤孝彦・大川博之・小林澄子・落合康博)
- 教育講演Ⅰ 在宅医療における救急総合診療
- 教育講演Ⅱ 在宅医療の後衛—法律家の観点から
- ランチョンセミナーⅠ 看緩和医療の標準化：癌性疼痛クリニカルパスを中心に
- ランチョンセミナーⅡ 在宅医療における一次救命処置—気道内異物への対処を踏まえて—
- ランチョンセミナーⅢ 神経難病における在宅医療の必要性和問題点
- ランチョンセミナーⅣ 在宅医療における尿路管理
- 一般公開講座 在宅医療における地域看護のあり方Ⅱ —家庭看護の技術—
- 一般演題
- 症例報告 携帯型24時間心電血圧記録器を利用した在宅歯科治療時のモニタリングの効用について

鴨下 重彦
山本 和利

寺沢 秀一
宇津木 伸
堀 夏樹
松田 繁
服部 信孝
武井 孝
荒賀 直子

松尾 兼幸、松尾 学

日本在宅医学会認定専門医制度規定……………191
投稿規程……………197

投稿承諾書……………198
編集後記……………201

日本在宅医学会

● 巻頭言

在宅医療の基本に立つ発展をめざして
－「在宅医療研究所」発足の
“きざし”－



佐藤 智 日本在宅医学会会長

「病気は家庭でなおすものである Oportet morbus domi curali」という諺を、私はしばしば引用して「在宅医学，在宅医療の重要性」を語ってきたが，古今東西の医療の歴史を繙くまでもなく，世界各国の医療は「家庭医療」が基盤である。

日本がこの40～50年の間に，病院医療に傾斜したことが，世界の医療の歴史から見れば異常な事態であった。しかし，この2～3年の間に，漸く在宅医療が復権してきたことは喜ばしいことである。

病院側からみれば，退院患者を安心して帰せる「受け皿としての開業医，家庭医」が増えてきたことと，病院医療の技術の幾つかが「在宅医療」の中で継続できるようになったことが「退院を促進した」契機になったのであろう。

この現状は病院側からみた流れであって，必ずしも在宅医療の本質からみての傾向ではなく，日本独特の現実的な現象である。今ここで，在宅医療のあるべき姿を明らかにしてゆくという営みを行うことなく，このまま放置すると「流れはまた元へ戻る」恐れはある。

今や，日本の医療を真剣に考えるならば，「医とは何か」「在宅医療とは何か」を原点に帰って，根本から考えることが必要である。まだまだ在宅医療の基盤は浅い。そのためには，例えば「研究所 Institute」のようなものを構築し，哲学的に，歴史的に，社会学的に，在宅医療を研究し，更に，在宅医療の現場で必要とする医療の実践の研究，医療者の実習を兼ねた人材養成をする「Institute」を築くことが急がれる。

在宅医療について話し合ってきた厚生省の辻 哲夫さん（現在の厚生労働省審議官）と，「本当の在宅医療を日本に広げるには、『在宅医療研究所』のようなものを作る必要がある。そこでは，結核対策に『結核研究所』が果たしたような学問の研究と同時に，教育と実習を全国的におこなうことだ」と語り合っている。今，まさにその時が来たと思う。

幸いに，現在「在宅医療を志し，実践している熱心な医師たち」が毎月東京，関西などで集まり「研究会」を行い，その成果を「教科書」に纏め出版した。既に素地は築かれていると思われるので，それらの力を更に成長させ，恒久化してゆくためにも，例えば，国立で「在宅医療研究所」のようなものが設立されることを，切に願うものである。

（以上）